

候兆症の認知 血液で診断

筑波大発V B 早期発見に活用

発表する。

筑波大学発のバイオベンチャー、MCBI（茨城県つくば市、内田和彦社長）は認知症の兆候を血液で診断する手法を開発した。特定のペプチド（たんぱく質の断片）が血中にあるかを調べ、認知症の前段階である軽度認知障害（MCI）の有無を判定する。現在は

筑波大の臨床医の間診など医師の経験に頼っているが、新手法が実用化すれば認知症の早期発見、治療に役立つ。

MCBIの内田社長は筑波大准教授を兼務しており、筑波大の朝田隆教授、産業技術総合研究所と共同

で研究結果をまとめた。結果は日本認知症学会で21日

MCIと認知症患者、認知症にかかっていない人の血液を比較。MCIと認知症の患者の血液に6種の特徴的なペプチドがあることを発見した。うち2種のペプチドの有無を調べると、MCI及び認知症患者と、それ以外の人を完全に区別できるといふ。

臨床試験などを経て2015年の実用化を目指す。